

SSKR I.L.EXPRESS

全国自立生活センター協議会 (JIL)
Japan Council on Independent Living Centers
〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11-1F
TEL 042-660-7747 FAX 042-660-7746
E-mail:jil@d1.dion.ne.jp URL http://www.j-il.jp/

jil

東北関東大震災 障害者救援本部特集号

自立情報発信基地

震災1年を迎えて、被災地は

代表 中西 正司

震災1年をむかえて、現地の状況は、目まぐるしく変わってきました。

福島では、被ばく線量の高い障害者たちは、現地にとどまるべきか、ほかの地域に移転すべきかの選択に迷い始めています。また、介助者がすでに移転してしまっていて、60人必要なところに40人しか残っておらず、新規募集をしても、ほとんど介助者がみつからないという状況にも直面しています。したがって、介助者がいない時間は、不安に満ちた生活を送っている障害者も多くなってきました。この状況で障害者たちがいつまで現地で踏ん張れるのか、また介助者もいつまで現地にとどまってくれるのかは、差し迫った課題です。私たちにできることは彼らを側面で支え、東京や関西方面への転居を目指す人たちについては住む場所や介助サービスを受けられるように支援をすることなどです。

また現地事務所の維持も、救援本部ではかなりの負担となってきました。被災地センターも沿岸部に拠点が出来ました。岩手では、朝日厚生文化事業団のご支援を受け、自立生活センターの当事者リーダーが現地に滞在して当事者エンパワメントをおこない、自立生活の理念の普及につとめています。

みなさんにご協力いただいた救援基金は、10か月以降より寄付金が急激に落ち込んでおります。今後少なくとも3年間は支援活動を継続していきたいと考えておりますが、現在の状況で月に1000万の支援金をつかわせていただいております、このままの金額で支出していくと、あと1年で基金残高がゼロになる可能性があります。

そこで、皆さんに再度ご寄付をお願い申し上げます。

基金の用途は、現地事務局の維持継続、介助スタッフの雇用継続、地方転出者の支援のための交通費や介助者費用、現地での移送サービス用車両の維持費、運転協力者への謝礼などです。皆さんからの息の長いご支援を承りますようお願い申し上げます。



3/14 救援本部を立ち上げ、救援活動が始まった

本部に届いた救援物資をトラックで被災地に運ぶ



各地のCILが街頭で募金活動を開始、現在も続いている

「たすけっと」に届いた救援物資



●● 被災地・被災者に寄り添った支援活動を ●●

あの3月11日からもうすぐ1年を迎えます。

被災地では、チラシのポスティングや口コミによる被災者のニーズの発掘・聞き取り・個別支援の提供といった地道な取り組みが続けられております。今年は例年になく寒さだといわれていますが、2月はじめに被災地を訪れて、その寒さに東北の冬の厳しさを実感しました。最近の活動の様子を報告します。

★ 活動の拠点が内陸部から沿岸部に移り、より地元密着の支援ができるようになりました。

当初、被災地障がい者センターは、盛岡・仙台・郡山という内陸部におかれました。救援活動を引き受けてくれる障害者の当事者団体の存在があったからです。

しかし、被災者の多くは、津波被害が多かった沿岸部に集中していました。内陸部から沿岸部へ出かけるのには、山あいを車で数時間もかけなければなりません。個別支援に十分な手がかけられませんでした。

そこで沿岸部での事務所の設立が、求められておりました。今回、沿岸部の被災地の障害者の方々や地元の皆さんとつながることができ、地元密着した支援ができるようになりました。また、事務所に立ち寄ってくれたり、お茶会を持ったり、新たな出会いも生まれています。その先には、事業所の立ち上げもめざしています。



被災地障がい者支援センター大船渡

「みんなでがんばべし」と元気いっぱいのスタッフの皆さんです。地域の方々の交流の場になっています。



被災地障がい者センター宮古

被災障がい者の方々が、イベントに集まってきます。子どもたちのディケアーにも使われました。



被災地障がい者センターみやぎ・石巻支部

石巻のタウン誌の発行を考えています。震災以前より、障がい者が住みやすい街作りをめざします。

★ 個別支援の多くは送迎サービスです。通院・買い物・通学に利用されています。

雪道での送迎は気をつけています。病院までの往復と診療の間待機し、薬をもらうまで半日はかかります。(大船渡)



宮古から盛岡の歯医者に通院です。宮古にはこの子を見守ってくれる歯医者がありません。(盛岡)



事務所の壁やノートには送迎の予定がびっしりと書き込まれています。なぜ送迎がこんなにも求められているのでしょうか。まず地域の交通手段が復旧していないので、バスも電車も通っていません。町の機能も復旧せず、商店が少ないです。病院も被災しており閉鎖しているところが多いです。仮設住宅が不便な高台に建てられています。これまでは、家族や親戚で支えてきたが、そのつながりが壊されてしまいました。加えて、今はこの寒さです。雪道です。被災地センターのスタッフの方々は、車が少ない・人手がほしいとっていました。

★ 交流イベントやティサービスに地域の方々が集まってきました。入浴サービスも喜ばれます。



スロープをつけました。土曜日には障害当事者や関係者・地域で福祉活動をされている団体などが集まってきました。(石巻)



障がい当事者が被災地の当事者を支援するプロジェクトによる地域交流会に30数名の参加者がありました。皆さん仮設住宅から出向いてくれました。

「お風呂に入って、マッサージしてもらって」と本当に感謝されていました。被災地センターみやぎ県南支部のスタッフは、その活動が認められて、町から復興事業の一環として事業所を立ち上げてほしいと予算がついたそうです。南三陸町でも県北支部と関わって、事業所の話が持ち上がっているようです。宮古は休み中の児童保育サービスにつかわれました。人が集まれば、そこから次の展開が生まれてくるのでしょう。

★ 福島では、復興に向けてさまざまな事業が試みられています。

福祉関係団体が集まって、「復興会議」を定例化して復興に向けての事業を推進しています。

- | | |
|------------------|--------------------------------|
| 相談支援事業 | 被災後の生活相談や原発による損害賠償関連の相談 |
| 福祉介護職員マッチング事業 | 県外のボランティアと障がい者関係事業所をコーディネート |
| 被災障がい者自立支援拠点整備事業 | 一時避難・交流サロン・仕事おこしのワークショップ等を実施 |
| 原発賠償に関する学習会 | 東電の賠償問題を障がい者にもわかりやすく提供 |
| サテライト自立センター事業 | 福島県内の障がい者の長期避難を促進 |
| UF787プロジェクト | 障がい者の仕事おこしを目的にカンパッチなどの販売活動を展開中 |

神奈川県相模原市の避難拠点「MUGEN」
宿泊希望の方は 救援本部へどうぞ



避難体験ツアー
というとし硬く聞こえますが、力を抜いて楽しめるツアーです。私ももう少し宿泊したいな

被災地からの報告 (その1・2は前号に載っています)

その3 福島県田村市

鈴木 絹江 (福祉のまちづくりの会)

3月11日に何が起きたか

3月11日14時46分、私は自分の家にいました。体力の関係で、一日のうちに起きている時間が少なくなっているの、横になっていました。私は、地震の時は逃げないと決めています。私の足で逃げ切れるものではないと思っているからです。地震は、もうゴッコゴッコゴッコゴッコで縦ゆれで、すごい音でした。

地震がおさまって、ヘルパー達はすぐに利用者の安否確認の電話をいれ、電話だけではなく状況確認にいきました。たまたま生活介護[ミラクル]というのをやっていたので、そこにちょうどみんながいたんです。3時ちょっと前だったので、さあ帰ろうかというところだったので、だれも怪我はなくてすみしました。

後からの報告で、家の瓦が落ちたとか、皿が割れたとか、ひびが入ったとかで、そんなに大きな被害ではありませんでした。まず、水道が止まりませんでした。それと電気も消えませんでした。ライフラインはつながっていました。

爆発の衝撃

次の日の12日に原発が爆発したことが、私達にとってすごく大きな衝撃でした。うちは妊婦のヘルパーが3人いました。女性の職場ですので、子持ちがたくさんいます。私は、妊婦ヘルパーに「とにかくあなた達はまず逃げなさい。事業所のことはいいから避難しなさい。」と言いました。

原発というのは、20何年前にチェルノブイリの爆発の話をはんのかすかに聞いていたのです。私はあまり熱心ではありませんが、反原発の1人でもあります。だから覚えていることは、『原発

が爆発したらまず100キロは逃げなさい』でした。だからとにかく避難しなくては、ここに居たのではまずいということを感じました。



でも原発が爆発しても、自分の目の前の景色は何にも変わっていないんです。だって、電気はきてますし、水道は出てますし、液状化現象にもなっていません。じゃあ、私たちはどうしたらいいのかということ、原発が爆発する、放射能がでるってどういうことなのかを知ることになりました。うちのヘルパーの中に反原発運動をやっていた方がいたので、即、彼にきてもらってお話をしてもらいました。それで、意識を持って原発のことを考えていた人には、即避難してもらいました。その時に事業所を去る人を決して恨まないこと決めました。私達、原発のところにいる人間は、本当に人として究極の選択をしなくちゃならないと思いました。これは事業所としてとか障害者の介助やっているからとかでは、押しとどめておくことができないぐらいのことだと思います。

ただ事業所をやる人間としては失格だったのかもしれない。即、ヘルパーたち3人がいなくなったら、事業所は回りませんでした。その日からどうしたのかというと、家族のいる方は家族にお願いしました。事業所の状況は、「ガソリンがなくなったので、ヘルパーにこられません」とか、中には「1時間かけて歩いてきます」といつてくれた方もいます。「子どもが小さいので避難させ

てください」という人もいます。避難した人も「申し訳ない」と涙ながらに行きました。本当に避難する人たちも苦しい選択のなかで避難していききました。でも私は「事業所として、避難していいよ」といったことは、人として正解だったと思っています。彼らは、動けない人を置いてきたという苦悩に苛まれているのです。

あわただしい避難

それで私たちは避難するのか思案していた時に、次々と原発が爆発していったのです。これではもうヘルパーも来られません。そこで避難できる人たちはみんな一緒に昭和村に避難しました。

昭和村は100キロ以上離れていて、その時は雪が2メートルもありました。会津をこえたら空気が違うなという感じがしました。昭和村では福祉的なサービスの支援を受けようと思ったのですが、「そんな重度の人がきたら村は困ってしまうから、もっと町のところへ行ってください。」みたいなことを行政側に言われました。まあこれでは無理だなと思って、次は新潟にいきました。

新潟県は中越沖地震のことがあったので、『今度何かあった時は助けよう』という気持ちをすごく持っていたので、いろんな情報をくれました。どこの旅館にとまっても一律素泊まり4000円ということでした。そこで、一番大きなホテルだと絶対バリアフリーのルームがあると思って、月岡温泉に避難しました。あそこはほんとにバリアフリールームがあり、和室洋室ありお風呂にもシャワーチェアがあり、段差がなく、一般のトイレもユニバーサルデザインになっていました。

本当にそこに避難できたことは、私達にはラッキーでした。金銭的な面ではゆめ風基金を受けて、安心してやっと地震のない生活と地震に脅かされることなく眠れる毎日になりました。

そういう風ななかで避難していましたが、新潟の人たちには、「原発が爆発したらもう戻れない

だろう。こっちで暮らしたらいいんじゃないの」とかいろんな支援の手を差し伸べていただきました。ところが私たちは、避難するとか移住するとか考えずに、ただただ追い立てられるようにその場を離れたというだけであって、自分の地域以外のところに住むという覚悟をして避難していったわけではなかったのです。ですから、一生懸命支援してくれる人たちのことばがすごいプレッシャーでした。相手が善意なだけに、決められないことを決めるということは、こんなにすごくストレスなんだということを感じました。

避難か 帰るかの苦悩

ただホテルにいつまでもいることはできません。お金がどんどん減っていきます。どうするかって言う時に、CIL新潟のバリアフリールームを借りることが出来ました。

そんな時、松本寿美子さんから3月25日に連絡が来ました。家族と共に避難所に避難したが、家族から「これ以上介護ができないからどこの施設でもいいから入ってくれ」と言われたそうです。「私は施設に入りたくないの、助けてください。皆のところに行きたい」という内容でした。それで、CIL新発田の一軒屋に暮らす事を選択しました。

まるで、戦争がはじまったよう

私たちは、4月1日から事業を再開しました。家に戻ってきた時には、郡山の町も田村の町も車が通っていないんです。まるで死んだような町でした。鳥も雀もいない。車があったらと思うと、それはガソリンスタンド前に長蛇の列。本当に町の中を歩く人もいない。毎日自分の部屋の中から見えるのは、何台も何台も通る迷彩色の自衛隊のジープ、岡山県警だの滋賀県警だの福岡県警だのパトカーです。

私はまるで戦争が始まったと思いました。そして発表されていることは、「原発は大丈夫だ、安全

だ」と「チェルノブイリの10分の1しか出ていないから」という大本営発表です。情報操作されていましたし、自衛隊だけが町の中をおおっぴらに歩いているのを見て、こうやって戦争が始まっていくのだと、私はその時思いました。今でも原発という核戦争が始まったと思っています。

私は原発の爆発が無かった事にしてこれからも生きていくのか、それともすべてを知って放射能の汚染の中で生きていくのか。窓を閉め切った部屋の中で、洗濯物を外にも干せないで、家の中

でもマスクをかけて、できる限り水道の水を飲まないようにして。ここでいいのかここを離れるのかと、朦朧とする頭の中で同じところをグルグル・グルグル悩みながら、今生活しています。1分1秒でも早く福島から離れたいと思う気持ちと今後どのように生きていくのかなということ、今まで何を大切にしていたのかも何を大切に生きていくのか、そんなことが問われているような気がします。

(2011/7/19 JIL 総会講演記録 要約)

その4 宮城県石巻市

伊勢 理加 (被災地センター石巻)

その時、切迫した感じは薄かった

あの日、強い揺れのなか家族や近所の方々との安否確認後に、徒歩で5分かからない指定避難所の小学校に向かいました。次女(高校3年)と三女(中学3年)、そして職場から戻った主人と私の4人で車に乗り込みました。正確には記憶していませんが、地震後20分以上経過していたと思います。慌てていたのでしょうか、私はいざという時のために用意してある「非常用持ち出し品」のことは頭に浮かばず、あたふたと必要なものをかばんに詰めることに時間を要しました。特に重度障がいのある三女が一昼夜過ごせる量の薬や医療ケア用品に忘れ物はないようにとの思いでした。

その時点での近所様子は、「避難する?」「大丈夫だよ」など切迫した感じは薄かったように覚えています。一旦は車に乗り込んだものの、車用ワンセグテレビから津波に襲われる浜の報道を目にし、近所の方々に避難を勧めるため、急いで車を降りていました。

私を含め、地域の防災意識が低かったことは否めません。「非常用持ち出し品」を普段から強く

意識していれば、慌てず時間をロスすることなく、もっと安全に避難できたと思います。また、私



たちの住む地域では、住民対象の防災訓練を実施していませんでした。そうした訓練を定期的に行っていたら、我が家も含め地域の方々の判断と行動は素早く的確なものになっていたと思います。

娘たちが学んだ学校が避難所

その後、指定避難所である小学校へ向かいました。運よく渋滞の国道を抜けたどり着いた時は、もう既に学校は混雑していて、駐車スペースもない状態でした。戸惑っていたところ、三女の状態を知る知人が誘導役をしてくれ、娘が乗り降りするスペースをようやく確保することが出来ました。そこは娘たちが学んだ学校です。三女も6年間過ごした校舎です。娘の在籍時から勤務していた先生もいらして、あの状況の中とても心強く感じました。地震発生時5人家族のうち4人がたまたま家に居た幸運と家族以外の方々の力を借り

ることで、私たち家族は大津波から命を守ることが出来ました。

我が家の場合、三女も居住地の小・中学校に通い隣近所や地域の方々と学校行事や子供会行事で接することが多かったため、娘の障がいに対する理解が浸透していました。その後の避難所の生活のなかで、人的協力をいただき、また精神面でも支えていただきました。後日聞いた話では、障がい者または主介護者が日頃から地域とのかかわりが薄く、避難所へ行くことをためらったり、避難所の生活を継続できなかったケースがあったそうです。私たち当事者が地域への理解を広める努力をしていく必要があると感じました。

多くの方から支援の手が

避難生活の期間中、多くの方々に支援をいただきました。以前から交流のあった仙台市のC I L たすけっとのスタッフの方が、震災の数日後に災害ボランティアへ三女の存在を発信してくださったことで、早い時期に思いもよらない支援の手が届きました。また、同じ悩みを持ち日頃から交流のある県内外の方々から、たくさんの食料や生活用品が届けられました。すべてを失い、日用品の買い物すらできない状況の中、大きな救いになりました。また、新聞やテレビなどのマスコミを通じて、障がい児・者のご家族の方からの物資提供もあり、助けられました。

大津波は行政機関にも大きな被害を与えました。災害時要援護者登録を進め、災害時対応をマニュアル化していた行政からの安否確認は、11日目に相談事業を委託されている事業所からの連絡が初めてでした。

我が家の場合は、運よくこの大災害を乗り切ることが出来ましたが、安否確認が徹底されず、物資や情報が得られず、私たちより大変厳しい状況に置かれた方々もいました。防災や減災に対する考え方の中に障がい者本人または主介護者の目

線がなければ、災害から命を守ることは出来ません。また避難所のあり方にも同じ目線がなければ、助かった命をつなぐことは厳しくなります。今後はこれらのことを行政に要望していくとともに、個人のみならず団体同士の支援ネットワークの重要性を発信していきたいと思っています。

仮設住宅に移れない

その後5月に避難所から津波被害のなかった私の実家に移り、8月までお世話になりました。今は一戸建ての借家（仮設住宅扱い）に移り住んでいます。

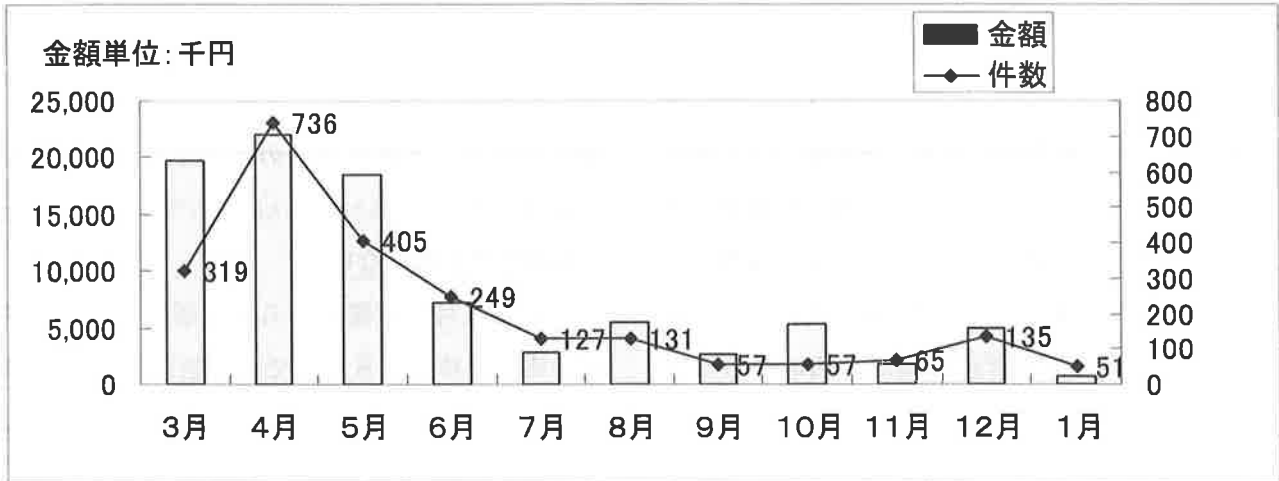
当初はもちろん仮設住宅希望でした。障がい児・者の生活スタイルにも配慮のあるタイプが提供されると信じて、抽選に当たることを辛抱しながら待っていました。しかし、仮設申し込み時の優先枠の画一的な設定により、本来当たる確率が高いはずの優先枠が、一般の抽選枠よりも当然倍率が高くなり、結果、配慮の必要な方々がいつまでも仮設住宅に移れない状況が続きました。

また当選しても、建築面や設備機能に障がい児・者などへの配慮がないことから、入居後に支障が出ているケースが多く聞かれるようになりました。市にたいして、仮設住宅建設に福祉的視点がないことなどへの改善を求め、要望や話し合いをしましたが、展望はありませんでした。そんな時、娘の出生からいつも見守ってくれている友人が娘のことを気遣い、今すんでいる物件を紹介してくれました。災害から8ヶ月が過ぎ、石巻市の復興計画も素案が発表されました。今後、予定される災害公営住宅や街づくりなどについても、障がい児・者にも配慮ある計画となるよう、より多くの声を行政に届ける必要性を届ける必要性を強く感じています。

(被災地障がい者センター石巻の機関紙より要約)

紙面の都合で要約させていただきました

〇〇〇 皆さまからいただいた支援金 〇〇〇
合計 91,064,829円 延べ 2,332件 2012年1月現在



〇〇〇 皆さまよりお寄せいただいたあたたかいお気持ちは、〇〇〇
下記のように使われています。

- | | |
|---|----------|
| 被災した障害者団体の復興・救援活動に
(被災した建物の改装や再建の支援 運営資金など) | 約 1200万円 |
| 3県の被災地センター(沿岸部7つの拠点含む)活動費に
(特に移送サービスのための人件費やガソリン代が多いです) | 約 3200万円 |
| 被災地への障害者ボランティア派遣に
(当事者による被災地の障害者への情報提供、自立相談支援) | 約 170万円 |
| 障害固有のニーズに基づく救援物資購入費用
(ポータブルトイレ 使い捨てシート インパーター 折りたたみ式ベット等) | 約 560万円 |
| 移動困難者への移送サービス用リフトカー等の購入
(軽自動車 4輪駆動の乗用車 移送用リフトカー 雪道の送迎に大活躍) | 約 640万円 |
| 被災障害者の証言・記録映像作成に
(5月ごろには完成します。被災の実態を多くの皆さんにお知らせします) | 約 140万円 |

東日本大震災発生以降、それぞれの生活の問い直しが始まったのではないのでしょうか。救援本部では皆さまのご厚意に支えられ、被災地の障害者団体と連携しながら、現地での様々な支援に取り組んでできました。救援活動が本来の社会資源に移行できることを目指し、地域の方々とながらつながるように、これからもずっと、被災障害者支援を、必要な限り継続していきます。

〇〇〇 今後とも皆さまからのご支援をどうぞよろしくお願い致します 〇〇〇

東北関東大震災障害者救援本部
 <東京事務局> 全国自立生活センター協議会(JIL)内
 〒192-0046 東京都八王子市明神町 4-11-11 シルクヒルズ大塚1F
 TEL: 042-631-6620 FAX: 042-660-7746 E-mail: 9enhonbu@gmail.com
 ホームページ <http://shinsai-syougaisya.blogspot.com/>



《救援活動の状況については、上記のウェブサイトにて、随時ご報告させていただいております》